

後藤 淳一 優秀審査員賞

(北海道札幌市)

近藤 正博

孫娘へ

その小さな体でよくぞ生まれてくれました。あなたのお母さんは子宮にできたポリープのせいで、早産のおそれがあり、また、出産の時も大量の出血があるかもしれないと言われ、二十四時間点滴をしながら、ずっと入院生活を送っていました。

初めて「おじいちゃん」となる私も、初めて母親となる娘も、あなたが生まれる瞬間をどんなに首を長くして待っていたことでしょう。

娘は「私が駄目でも赤ちゃんだけはどうか助けてあげて下さい」といつも言っていました。私は、母ともどもどうか無事でありますようにと祈らずにはいらませんでした。

そうして陣痛から十八時間後、幸運にもあなたは自然な形で生まれてきたのです。

かつて娘が生まれる時も、紫斑病の妻から、まともに子供が生まれるかどうか危ぶまれました。しかし何とか無事に出産できたのです。その娘が今度は初めて女の子を出産したのです。そうして、あなたが一人前の女性になった時、再び子供を生むようになるのかもしれないかもしれません。命というものは、こうして代々受け継がれていくのですね。

二千五百グラムという小さな体であなたは精一杯生きています。そんなあなたのつぶらな瞳を見ると何かしてあげずにはいられない気持ちになります。無償の愛とでも呼べばよいのでしょうか。あなたもそうした愛を一身に受けてすくすくと育つて下さい。

そうしてあなたが一人前になった時、今度はその愛を他の人にも返してあげて下さい。あなたは、肉親だけでなく、お医者さん、看護師さん、いや、社会を成り立たせている多くの人の協力によってこの世に生を受けたのです。社会とはそういうものです。あなたもいずれ、そうした人間社会の責任を果たして下さい。

初めてあなたの「おじいちゃん」となった者から、ささやかなメッセージを送りました。

「生まれてくれて、本当にありがとう。」